

石塚遺跡

ISIZUKA SITE

埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

—緊急地方道路整備事業市道伊那北与地線—

2002

伊那市教育委員会

伊那市建設部建設課

あ　い　さ　つ

近年、各地区で埋蔵文化財、あるいは石造文化財、民俗文化財、民俗芸能等々を含めた文化財保護思想の高揚が強く呼ばれるような傾向になってきています。このような動向のなかで我が伊那市でも文化財に関して数多くの調査報告書を刊行してまいりました。

ここに報告する石塚遺跡は本文中にも触れてありますように、伊那中央病院建設事業に先立って平成11年度に大規模な発掘調査と関連するものであります。

今回の調査は伊那中央病院に至るまでの道路拡幅事業によるものであり、いわば、この遺跡に関して第二次調査となるわけであります。極めて狭い範囲の調査でしたが、この報告書に記載されているような成果を得ることが出来ました。

発掘調査は7月下旬から8月上旬の炎天下に実施され、連日の暑さに悩まされましたが、ここに、調査報告書が刊行されることは誠に喜ばしい次第であります。最後に、快く調査に御協力を頂いた伊那市建設部並びに地権者、連日熱心に調査に当られた調査員、作業員の皆様に対し深甚なる感謝の意を表する次第であります。

平成14年2月28日

長野県伊那市教育委員会

教育長 保 科 恭 治

目 次

あいさつ

目 次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 石塚遺跡とその環境	3
第1節 位置と地形・地質	3
第2節 周辺の遺跡との概要	5
第Ⅱ章 発掘調査の経過	6
第1節 発掘調査に至るまでの経過	6
第2節 調査の組織	6
第3節 発掘調査日誌	7
第Ⅲ章 発掘調査	8
第1節 調査の概要	8
第2節 遺構と遺物	8
(1) 縄文時代の遺構と遺物	8
第5号住居址	8
第1号土坑	11
(2) 縄文時代の遺構外出土遺物	12
第Ⅳ章 所 見	14

挿 図 目 次

第1図 伊那西部地区遺跡分布図	4
第2図 地形及び遺構・トレンチ配置図	9
第3図 第5号住居址・第1号土坑実測図	11
第4図 第5号住居址出土土器拓影	11
第5図 第1号土坑出土土器拓影	12
第6図 遺構外出土土器拓影	12
第7図 遺構外出土石器実測図	13

図 版 目 次

図版1 遺跡近景及び遺構
図版2 発掘調査状況
図版3 発掘調査状況

第Ⅰ章 石塚遺跡とその環境

第1節 位置と地形・地質

今回、発掘調査を実施したのは石塚遺跡の最南端部で、烏谷川の左岸河岸段丘突端面に位置し、長野県伊那市山寺地籍に含まれている。本遺跡の西境は県道伊那・箕輪線（通称春日街道）が南北に走り、これによって伊那市と南箕輪村との行政境を成している。

遺跡地までに至る最短距離の道順を述べる。JR飯田線伊那北駅で下車し、駅前に立ち並ぶ山寺商店街を両側に見ながら、信号機の設置された三叉路を西方に向かう。この地点から急傾斜の登り坂が延々と続く、登りが緩傾斜になりだす所が長野県伊那北高等学校への入口であり、案内板が建てられている。さらに西へ進むとやや平坦地が広がりをもち、右手に養鱒場のある林が、左手に高尾町集落の家並が目に映る。平坦地が終わり、やや傾斜をなしてはじめている地点が今回の発掘調査地点である。この一帯は大正末期に西天竜の通水が可能になった。このことが直接的な動機となって土地改良事業が施工され、現在のような美田の初源となったのである。

伊那市を包含する伊那谷の地形的景観の特色は東の南アルプス（別称、赤石山脈）、西の中央アルプス（別称、木曾山脈）に挟まれ、天竜川を主流とする造盆地状地形にある。この盆地状地形は南北に袋状の縦谷状を呈し、北の辰野から南の天竜峡まで約60km、幅4~10kmにわたる平坦面を展開している。両アルプスの山裾、山麓に源を発する三峰川など大小様々な小河川が複雑多岐にわたる山麓扇状地、数段に及ぶ河岸段丘を形成しながら天竜川に注ぎ込み、いわば天竜川の支流的存在である。

天竜川を中心にして東側を竜東地区、西側を竜西地区と大別して呼んでいる。石塚遺跡周辺の地形的起因は小沢川によるところが極めて大と想定でき得よう。小沢川は木曾山脈系茶臼山の支流である南沢山と権兵衛峠を境にする経ヶ岳山系の沢水を集めて東流し、伊那市荒井区錦町・坂下区入舟町付近で天竜川と合流する。

経ヶ岳山麓地域の地形面について 経ヶ岳山麓付近を扇頂にして複合扇状地が広範囲に及んでいる。この一帯には南から小沢川、大清水川、大泉川、帶無川、深沢川、桑沢川がそれぞれ東流して、最終的に天竜川に合流するこの一帯での扇状地地形面を大別すると次のようになる。それは大泉面、神子柴面、新期扇状地面である。

経ヶ岳山麓地域の地質について 伊那谷盆地内の地層は扇状地を構成する砂礫層が主流で、粘土層、亜炭層、火山碎屑岩層は少ない。発掘調査地点は上伊那北部扇状地帯に含まれ、その地質は、下位より「田畠疊層」「神子柴粘土層」「大泉疊層（下部・上部）」とさらに「新期テフラ層」に分類される。



遺跡の名称

- | | | | | | | | | | |
|-------------|------|----------|----------|----|----------|----------|----------|----------|-------|
| ①石 塚 | 原 | ⑪西冀輪資源学校 | ⑫天 庄 | 1 | ⑬小 花 岡 | ⑭ますみヶ丘上 | ⑮狐塚南古墳 | ⑯ウグイス原園地 | ⑰消 水 |
| ②北 刹 | 前 | ⑫熊野神社 | ⑬上 戸 | 2 | ⑯中 の 原 | ⑯船 | ⑯狐塚北古墳 | ⑯上 の 山 | ⑰水ヶ 清 |
| ③田 代 | 富 | 士 坂 | ⑭天 庄 | 2 | ⑯与 地 山 寺 | ⑯鼠 平 | 2 | ⑯山 の 神 | ⑰牧 |
| ④古 屋 故 | 在 | 家 家 | ⑬溝 | 3 | ⑯与 地 原 | ⑯鼠 平 | 1 | ⑯高 尾 | ⑰大 田 |
| ⑤金 銀 | 塘 | 高 横 | ⑭下 の 原 | 3 | ⑯北 方 | ⑯上 手 原 | ⑯高 士 | ⑯居 | ⑰山 本 |
| ⑥財 木 | 久 保 | 烟 | ⑯東 沟 | 4 | ⑯矢 墓 | ⑯手 原 | ⑯今 | ⑯今 | ⑰河 |
| ⑦藏 里 山 畜 | ⑯堆 烟 | 高 墓 | ⑯富 土 墓 | 5 | ⑯矢 墓 | ⑯城 烟 | ⑯城 | ⑯城 | |
| ⑧經 タ 岳 山 畜 | ⑯中 道 | 高 墓 | ⑯外 墓 | 6 | ⑯八 人 墓 | ⑯土 墓 | ⑯土 墓 | ⑯原 外 | |
| ⑨西冀輪小学校 | ⑯桜 烟 | 高 墓 | ⑯外 墓 | 7 | ⑯ま すみヶ 丘 | ⑯ま すみヶ 丘 | ⑯小 沢 原 | ⑯か んぜ | |
| ⑩大 葦 西 ⑯櫻 墓 | 數 | ⑯堆 墓 | ⑯お ぐ し 沢 | 8 | ⑯小 沢 原 | ⑯赤 板 | ⑯小 沢 神 社 | ⑯御 国 東 部 | |
| | | ⑯堆 墓 | ⑯九 山 清 水 | 9 | ⑯伊 势 | ⑯伊 势 | ⑯伊 势 | ⑯御 国 南 部 | |
| | | ⑯堆 墓 | ⑯内 | 10 | ⑯見 松 | ⑯見 松 | ⑯見 松 | ⑯宮 ノ | |
| | | ⑯堆 墓 | ⑯九 山 清 水 | 11 | ⑯八 人 墓 | ⑯古 墳 | ⑯月 見 松 | | |
| | | ⑯堆 墓 | ⑯内 | 12 | ⑯八 人 墓 | ⑯古 墓 | ⑯月 見 松 | | |
| | | ⑯堆 墓 | ⑯内 | 13 | ⑯八 人 墓 | ⑯古 墓 | ⑯月 見 松 | | |
| | | ⑯堆 墓 | ⑯内 | 14 | ⑯八 人 墓 | ⑯古 墓 | ⑯月 見 松 | | |
| | | ⑯堆 墓 | ⑯内 | 15 | ⑯八 人 墓 | ⑯古 墓 | ⑯月 見 松 | | |
| | | ⑯堆 墓 | ⑯内 | 16 | ⑯八 人 墓 | ⑯古 墓 | ⑯月 見 松 | | |
| | | ⑯堆 墓 | ⑯内 | 17 | ⑯八 人 墓 | ⑯古 墓 | ⑯月 見 松 | | |
| | | ⑯堆 墓 | ⑯内 | 18 | ⑯八 人 墓 | ⑯古 墓 | ⑯月 見 松 | | |
| | | ⑯堆 墓 | ⑯内 | 19 | ⑯八 人 墓 | ⑯古 墓 | ⑯月 見 松 | | |
| | | ⑯堆 墓 | ⑯内 | 20 | ⑯八 人 墓 | ⑯古 墓 | ⑯月 見 松 | | |
| | | ⑯堆 墓 | ⑯内 | 21 | ⑯八 人 墓 | ⑯古 墓 | ⑯月 見 松 | | |
| | | ⑯堆 墓 | ⑯内 | 22 | ⑯八 人 墓 | ⑯古 墓 | ⑯月 見 松 | | |
| | | ⑯堆 墓 | ⑯内 | 23 | ⑯八 人 墓 | ⑯古 墓 | ⑯月 見 松 | | |
| | | ⑯堆 墓 | ⑯内 | 24 | ⑯八 人 墓 | ⑯古 墓 | ⑯月 見 松 | | |
| | | ⑯堆 墓 | ⑯内 | 25 | ⑯八 人 墓 | ⑯古 墓 | ⑯月 見 松 | | |

第1図 伊那西部地区遺跡分布図 (1:50,000)

第2節 周辺の遺跡との概要

伊那市地域内で、伊那西部と呼ばれている地区では現在、確認されている埋蔵文化財包蔵地、いわゆる遺跡は75カ所に及んでいる。遺跡の分布、立地については第1図伊那西部地区遺跡分布図を参照すること。遺跡の所在地点に関して、一目で判別できることは、75カ所の遺跡がただ漠然的に分布していないことが注目に値する第一点である。遺跡の所在地点は次のように三分類に大別可能である。その一つは山麓扇状地の扇頂部面、扇側部面。もう一つは天竜川の支流である小黒川、小沢川、大清水川、大泉川の両岸の段丘面。さらにもう一つは天竜川の支流、天竜川によっての山麓扇状地末端部面（学名：扇端部面）に形成された河岸段丘面である。

これらの遺跡を垂直分布面で概観すると、標高650m位から950m位に含まれ、パノラマ状的に理解できる。前述した三分類が可能な必須条件はあくまでも水便の問題である。

伊那西部地区にある75遺跡の時代的な内訳は旧石器を出すもの6、縄文草創期2、縄文早期3、縄文前期10、縄文中期60、縄文後期6、縄文晩期2、弥生前期1、弥生中期1、弥生後期6、古墳3、奈良・平安時代の土師器を包含するもの26、同じく須恵器を包含するもの29、灰釉陶器を包含するもの21、さらに、綠釉陶器を包含するもの2、中世陶磁器などを包含するもの12、近世として月見松経塚がある。これらのうち何らかの理由で発掘調査を実施した遺跡は遺跡番号②の北割、④の古屋敷、⑤の金鋸場、⑥の財木、⑩の大萱西、⑪の桜畠、⑫の天庄2、⑬の宮垣外、⑭の堀の内、⑮の小花岡、⑯の中の原、⑰の与地原、⑲の八人塚、⑳のおぐしづ、㉑の丸山清水、㉒の船窪、㉓の城畠、㉔のますみヶ丘、㉕の赤坂、㉖の伊勢並、㉗の狐塚南古墳、㉘の山の神、㉙の小黒南原、㉚の城楽、㉛の小沢原、㉝の月見松経塚、㉞の月見松、㉟の上の山、㉟の高尾、㉟の鳥居原、㉟の今泉、㉟の牧ヶ原、㉟の山本田代などがある。先に述べたように三タイプのグループを論じたが、それぞれについて概観しておく。

山麓帶遺跡群 この分類の仕方は山麓扇状地の扇頂部から扇測部周辺に展開している遺跡群を指して、このように呼ぶことにした。この一帯は山峰部分が終わって、水便、日当りがともに良好で、居住するには好適地に該当する。

支流两岸遺跡群 この分類の仕方は天竜川に注ぎ込む小黒川、小沢川、大清水川、大泉川などの両岸に形成された小規模の段丘面、または川に面した傾斜面に立地している遺跡群を指しているので、このように呼ぶことにした。この一帯のどこかに古代「令制東山道」の渡河点が存在していたわけであるが、明確な地点は把握されていないくて、推定での時点で議論を呼んでいる。

段丘遺跡群 経ヶ岳山麓より東へ向かって緩傾斜に広く展開している複合扇状地の扇端部、つまり、段丘形成に天竜川が大きく左右した位置に点在している遺跡群を指している。この一帯は豊富な湧水があり、養鱒場やワサビ栽培が盛んである。この一帯の西端部に小黒川活断層が南北に走行している。

（飯塚政美）

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまでの経過

今回、発掘調査の該当地となった石塚遺跡は伊那北停車場山寺上村線拡幅事業に伴う緊急発掘調査であり、調査が実施されるまでには各種の保護協議、事務上の手続きが実施され、それらの動きを年月日の順に従って記しておくことにする。

平成12年11月14日、長野県教育委員会文化財・生涯学習課職員、伊那市教育委員会社会教育課職員、伊那市建設部建設課職員の三者で綿密な保護協議を実施、支障のないように努めた。

平成13年4月3日付けで、伊那市長小坂権男と市内遺跡発掘調査団長友野良一両者間で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を締結。

平成13年8月8日付けで、石塚遺跡発掘調査終了報告書を長野県教育委員会教育長宛に提出。

平成13年8月8日付けで、石塚遺跡埋蔵物発見届の拾得についてを伊那警察署長宛に提出。

平成13年8月8日付けで、石塚遺跡埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会へ提出。

平成13年12月20日付けで、友野良一前発掘調査団長の死亡にともない発掘調査団長を御子柴泰正に変更する。

第2節 調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

伊那市教育委員会

委員長 登 内 孝

委員長代理 小坂栄一（平成13年12月21日まで）

　上島武留（平成13年12月22日から）

委員 伊藤 晴夫

　田畑幸男（平成13年12月22日から）

教育長 保科 恭治

教育次長 伊藤 隆

事務局 塚本哲朗（社会教育課長）

　伊藤初美（副参事・社会教育課長補佐・女性室長・青少年係長）

　白鳥今朝昭（社会教育課長補佐・社会教育係長）

　田原節子（社会教育青少年係）

　飯塚政美（社会教育係）

　牧田としみ（社会教育係）

　高松慎一（社会教育係）

発掘調査団

団長 友野良一（日本考古学协会会员）（平成13年12月19日まで）
御子柴泰正（長野県考古学会会员）（平成13年12月20日から）
調査員 飯塚政美（日本考古学协会会员）
本田秀明（長野県考古学会会员）
高松慎一（上伊那郷土研究会会员）
作業員 城倉三成 織井和美 酒井公士郎 有賀秀子 小田切守正（敬称略順不同）

第3節 発掘調査日誌

平成13年7月23日(月) 発掘現場へ発掘機材一式を運搬する。スペースハウスを建てる場所を選び、バックフォーにて整地を行い、スペースハウスを建てる。工事進捗の都合によって、上段地区よりトレンチ掘り（第1号トレンチ・第2号トレンチ）を実施する。この段階で縄文中期石器片、縄文中期土器がそれぞれ1片ずつ出土する。

平成13年7月24日(火) 発掘現場にて発掘機材一式を整備する。

平成13年7月25日(水) 第3号トレンチ・第4号トレンチ・第5号トレンチの3本を完全に掘り上げるが、遺構・遺物の検出は全くなくて、遺跡の希薄性が感じられた。

平成13年7月26日(木) 用地内の最東端部の水田にトレンチを南北に長く入れると黒い落ち込みが検出され、精査を重ねると一つは住居址に、一つは土坑になりそうであり、伊那中央病院建設予定地の遺跡発掘関連からして前者のは第5号住居址、後者のは第1号土坑とそれぞれ命名し、平面プラン確認につとめる。第6号トレンチ～第12号トレンチを設定し、夕方までには掘り終えるが、遺構・遺物の検出は全く無かった。

平成13年7月30日(月) 第5号住居址、第1号土坑の掘り下げを進める。第13号トレンチ～第22号トレンチを設定して、掘り下げを完了するが、何も検出しなかった。

平成13年7月31日(火) 第1号トレンチ～第22号トレンチまで図面上に記載する。第5号住居址、第1号土坑の掘り下げを完了する。その結果として第5号住居址は縄文中期初頭、第1号土坑は第5号住居址を切っている状態であった。

平成13年8月1日(水) 今まで掘ってきたトレンチの埋め戻しを開始する。第5号住居址、第1号土坑の清掃を終えて、写真撮影を済ませる。

平成13年8月6日(月) 埋め戻しを完了する。第5号住居址、第1号土坑の平面、断面実測を済ませ、ただちに発掘機材一式、測量機材一式を撤収、伊那市考古資料館に運搬して、今回の現場に於ける発掘調査を全て終える。

平成13年11月～平成14年2月 遺物の整理、遺物の実測、図版の作製、写真撮影。

平成14年3月 報告書を刊行し、本事業の完了をみた。

(飯塚政美)

第Ⅲ章 発掘調査

第1節 調査の概要

石塚遺跡の発掘調査は今回で2回目である。第1回目は伊那中央病院建設事業に伴って、平成10年～平成11年の2カ年間にわたって実施したものである。その時の調査結果は『石塚遺跡埋蔵文化財包蔵地緊急試・発掘調査報告書—伊那中央病院建設事業—2000 伊那市教育委員会・伊那中央行政組合病院建設課・伊那市土地開発公社』の通りであり、それぞれの遺構（縄文中期前葉の竪穴1基、平安時代の竪穴住居址4軒、時期不詳の柱穴群2基、時期不詳の溝状遺構1基）に伴って相当量の遺物が出土した。

遺物のうち、土器・陶器に限定して見る。特に土器については編年学的による追求をこころみると縄文中期前葉の梨久保式、縄文中期中葉の井戸尻式、縄文中期後葉の曾利式であった。土師器に関しては全て平安時代中期に含まれており、それらに伴出して、須恵器・灰釉陶器が出土している。特殊な遺物として、鉄製鉗錘車の出土があった。

以上の経緯からして、遺構の命名方法は通し番号制を採用した。よって、今回の発掘調査で検出した遺構は第5号住居址、第1号土坑と名付けた。これらから出土した遺物は少量であった。

第2節 遺構と遺物

(1) 縄文時代の遺構と遺物

第5号住居址（第3図 図版1）

本址は今回の発掘調査地区のうちで、最東端部に検出された。工事自体が道路拡幅の為に調査面積は限定された。従って、本址が実際に発掘調査できたのは四分の一程度であり、南北、東西ともに規模は不明であった。表土面から80cm位下ったソフトフランク層を掘り込み、平面プランは円形状を呈する竪穴住居址である。

現存している西壁は20cm程度と低く、外傾気味であった。南壁は不明で、東壁、北壁は用地外の為に発掘調査は不可能であった。床面は大般平坦で、堅い叩き状を呈し、その状態は良好であった。検出された中央部付近に焼土が多量に検出され、炉縁石の存在がないことからして地床炉を成していたのではないか。柱穴は10本程度検出されたが、住居址の全体像が不明であるために主柱穴と成り得るものと、配列状態は不明であった。東側に本址を切るようにして第1号土坑が発見され、これについて後述する。

本址の時期は出土した土器から見て、縄文中期初頭頃と想定される。

遺物（第4図）

第4図に掲載されている土器7片は全て第5号住居址より出土しており、縄文中期初頭頃に編年づけが可能であろう。



第2図 地形及び造構・トレンチ配置図 (1 : 2,000)

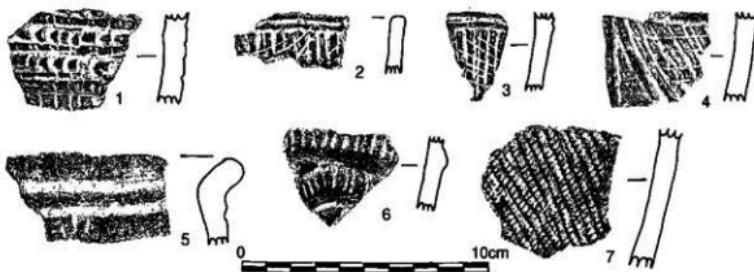


大局的に見て、文様構成は次のような四タイプに分類が可能であろう。横位のC字状連続爪形文が規則性を保ちながら施文されているもの（1、5）。（5）は大きく外反する口縁部破片であり、口縁上部に太くて、高い隆帯が横に貼り付けられており、この上に連續爪形文を製作当時は押捺してあったと思われるが、現在は剥落してしまって拓影には見られない。沈線を交叉状に配し、いわゆる籠目文状を形成しているもの（2～4）。隆帯を貼り付け、その周縁部に連続刻目文を加飾してあるもの（6）。単に全面にわたって太く、荒い斜縦文を無雑作に配してあるもの（7）。

色調は赤褐色（1、5）、白褐色（2）、白黄褐色（3）、黒褐色（4）、茶褐色（6）、赤褐色（7）と様々である。焼成は全片とも全般的に良好で、胎土中に少量の雲母、長石を含んでいる。



第3図 第5号住居址・第1号土坑実測図



第4図 第5号住居址出土土器拓影

第1号土坑（第3図 図版1）

本遺構は第5号住居址の東側に掘り込んで構築してある。したがって第5号住居址よりも新しいことは明確である。規模は南北、東西とともに用地外にかかるので不明である。一部分検出された壁高及びその状態は次のようであった。東壁は高さ100cm程度で、その状態はやや外傾

気味で凹凸があった。西壁は高さ80cm程度で、その状態は外傾気味で、凹凸は少なく、軟弱な状態であった。南壁は高さ120cm程度で、垂直に近く、凹凸が顕著で堅かった。北壁は全面的に用地外であったために全貌は把握できなかった。

床面は堅く、凹凸が認められた。遺物は第5図のようであり、それによれば、本遺構は縄文中期中葉頃に構築されたと思われる。

遺物（第5図）

第5図の土器片4点は全て第1号土坑より出土したものである。文様構成は荒い斜縄文（1）、細かな斜縄文（2、4）と鋭角な竹ベラによる沈線文を斜目に配す（3）をそれぞれ主体にしてある。（1）はやや外反する口縁部破片で、口唇部はやや丸味を呈し、口縁に沿って太く、厚い隆帯を横位に貼り付けてある。

色調は黒褐色（1、2、4）、茶褐色（3）を呈し、焼成は良好である。

4片とも縄文中期中葉頃に位置づけられる。



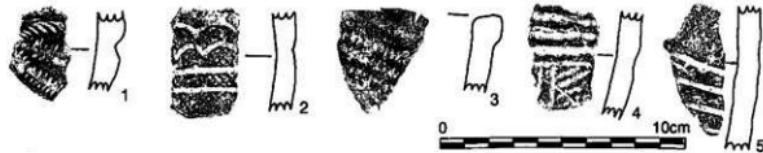
第5図 第1号土坑出土土器拓影

（2）縄文時代の遺構外出土遺物（第6図）

第6図の土器は5片ともトレンチ内に検出された自然の川の流砂に混じって出土した。従つて流れてきた可能性は極めて大であろう。

文様の主流は隆帯を貼り、その頂部や縁に深く刻目を彫り込んであるもの（1、3）。斜縄文地に平行沈線文や波状沈線文を施したもの（2）。無文地に深くて、鋭い沈線文が斜走しているもの（5）、無文地に深くて、鋭い沈線文を横位状、縦位状、斜目状にそれぞれ走向させて、全体的に見事な沈線集合スタイルを構成しているもの（4）等様々である。

色調は赤褐色（4、5）、黄褐色（2）、茶褐色（1、3）を帶びており、焼成は5片とも良好である。これらは縄文中期中葉に位置づけられると思われる。



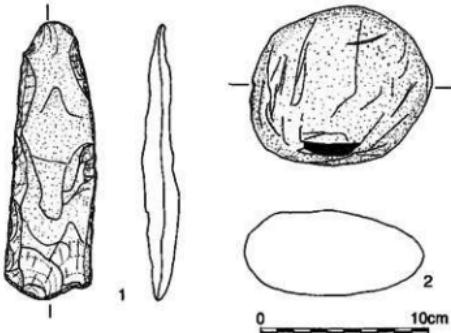
第6図 遺構外出土土器拓影

今回の発掘調査で発見された石器は第7図に掲載した2点だけであり、いずれもトレンチ内より出土している。

(1)は短冊形の打製石斧で、全面的に調整がゆきとどき、特に、周縁部にいたっては細かな剥離痕が明瞭で、美しい刃部を成し、きめの細かい硬砂岩を用いている。

(2)は緑色岩を利用した敲石の一種で、わずかに打痕を認める程度であり、極めて短期間の使用であったのであろう。

(飯塚政美)



第7図 造構外出土石器実測図

第IV章 所 見

石塚遺跡についてはこの一帯を耕作していた山寺・御園両区の古老達は大正14年に大々的に実施された西天竜土地改良事業時に多量の遺物が発見された事実を熱く語ってくれた。この事実については来伊され、上伊那郡内をくまなく実地踏査して、主要な遺跡をまとめあげた大著、鳥居龍藏博士『先史及原史時代の上伊那』に綿密に記載されている。

石塚遺跡は広い範囲を占めているが、その北西端部の位置に伊那中央病院建設が計画され、事業着手前の平成10年11月から12月にかけてと、平成11年3月に緊急試掘調査を実施した結果、平安時代の竪穴住居址3軒の検出が確認され、本発掘調査の必要性が指摘できたのである。これに基づいて、本格的な発掘調査を平成11年4月から6月にかけて実施し、次のような成果を得た。

試掘調査、発掘調査の結果については『石塚遺跡 埋蔵文化財包蔵地緊急試・発掘調査報告書 一伊那中央病院建設事業 2000 伊那市教育委員会・伊那中央行政組合病院建設課 伊那市土地開発公社』に詳細に記述されているので、是非とも、今後の研究に役立たせて頂きたい。

今回の調査成果について、概略的に述べてみる。

第5号住居址 全貌は把握できなかったが、検出された個所より判断して、平面プランは円形状を呈すると思われる。当然ながら、ソフトテフラ層を掘り込んだ竪穴住居址である。床面は大般平坦で、堅い叩き状を成しており、炉縁石の存在が確認できなかったことより、地床炉の存在性を強く示唆してくれる。このことを実証してくれる事実として、縄文中期初頭の梨久保式土器出土がある。この土器が出土する竪穴住居址では地床炉の発見がしばしばとなっており、縄文中期初頭の後半に出現する小形石圓炉の前段階に位置づけできるのである。

第1号土坑 第5号住居址の東側で、同址の床面を掘り込んで構築されてあり、よって第5号住居址より新しいことは歴然としている。調査面積が限定されていたためにその全容は不明である。出土遺物より、縄文中期中葉の井戸尻式の時期に含まれると思われる。

その他、トレンチ内より出土した土器片は破片の割れ口状況より、上から流れてきた可能性が強いと思われる。出土した石器2個の岩質は硬砂岩と緑色岩であり、これらは三峰川産と思われる。

(飯塚政美)



遺跡地を東側より眺む



第5号住居址・第1号土坑



第1号トレンチ



第2号トレンチ



第8号トレンチ



第13号トレンチ



第14号トレンチ



第15号トレンチ



第16号トレンチ



第17号トレンチ



第18号トレンチ



第19号トレンチ



第20号トレンチ



第21号トレンチ

報告書抄録

ふりがな	いしづかいせき						
書名	石塚遺跡						
副書名	緊急地方道路整備事業市道伊那北与地線						
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号	埋蔵文化財包藏地緊急発掘調査報告書						
編著者名	友野良一 御子柴泰正 飯塚政美						
編集機関	伊那市教育委員会						
所在地	〒396-8617 長野県伊那市大字伊那部3050番地 TEL0265-78-4111						
発行年月日	西暦2002年3月8日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村 遺跡番号	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○ ○	m ²	
いしづか 石塚	ながのけん いなし 長野県 伊那市 いなやまでら 伊那山寺	伊那市	40		平成13年 7月23日 ~ 平成13年 8月6日	500	緊急地方 道路整備 事業市道 伊那北与 地線
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
石塚	集落址	縄文時代 平安時代 江戸時代	竪穴住居址 1軒 土坑 1基	縄文中期土器 縄文中期石器	500mに及ぶ狭い 範囲の発掘調査であ ったにもかかわらず、 縄文時代中期初頭の 竪穴住居址 1軒、縄 文時代中期中葉の土 坑 1基が検出され、 集落址の存在性が明 確となってきた。出土 した土器は縄年学 的から見て、縄文時 代中期初頭の梨久保 式と縄文中期中葉の 井戸尻式と思われる。		

石塚遺跡

埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

—緊急地方道路整備事業市道伊那北与地線—

平成14年3月6日 印刷

平成14年3月8日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 伊那市 (株)小松総合印刷

